★倉橋賞受賞論文★

幼児の心身発達と環境（前）

――運動能力・社会適応を中心として――

奥平洋子・星永

はじめに

一　研究が出発するまで

(一)　体育指導の中で

星は「幼児体育」の授業内容研究のために、昭和五十年五月から与野市鈴谷保育所に週一回、体育日として運動あそびを入れている日に通い、保育者と一緒に幼児に接し、次のようなことを行なってきた。幼児の身体活動の幅を広げるということを目的とし、特に型にはまった運動をさせるというのではなく、さまざまな運動遊びを自然な形でとり入れ、その中で、子どもが思いきり走ったり、跳んだりといったような動きを、ボール、鉄棒、平均台などの遊具を使っての遊びや、遊具を使わない遊びなど全般にわたって行なった。

その際、とくにできるだけ速く走らせるようにするとか、遠くに跳ばせるなどに目標をおかず、運動経験を豊かにし、運動の幅を広げるという点にねらいをおいた。これらの場面を通してあらわれる具体的な行動から、子どもの運動の姿をつかむことができた。

一方、この運動場面を子どもの側からみると、子どもにとって、体育の日は強制とか苦痛を伴なう不快経験とはならず、むしろ、自分の身体機能を活発に動かし、快感情を誘発してくれる体験として受けとめられていたようである。このことは、赤のトレーニングウエアで指導していたことから、「アカ先生」というニックネームでよばれ、体育指導の日以外に保育者の連絡に訪れた時でも、「アカ先生、今日は体操をやらないの」と言ってくるなどの行動から推察された。

(二) 運動場面における個人差の発見

以上のように、楽しみに行動している運動場面であったが、子どもを観察しているうちに、次第に個人の特徴といったものが目につくようになった。一人一人生理学的にみても基礎の違いはあるのだから、運動の適応に差があるのは当然としても、子どもの中には、能力的にそれほど劣ってはいないようにみえるのに、実際やらせてみるとうまくできないという子もでてきた。それはなぜだろうかとみていくうちに、自信がなくひっこみ思案なため集団の中でうまく表現できないとか、そういう動きに慣れていないため、言われてもすぐに反応できないなど、運動の要因以外に原因があるのではないかと気づいた。この場面を一緒に観察していた奥平も同意見であった。本当の意味での幼児の体育指導を考えるならば、運動ができる・できないという一面的なとらえ方をするのではなく、これらの要因も理解した上で行なうことの必要性が感じられた。

(三) 保育者との話し合い

このような運動場面にみられた個人差は、他の保育場面でみられる行動ともつながりがあるのではないかということで、子どもの日常の姿や、あるいはその背景になっている性格、生育歴、養育態度などについて、保育者から情報を得るための話し合いをもった。

話し合いでは、それぞれの立場から、個々の子ども一人一人について日常場面でみられる行動特徴とか、運動面、心理的側面から三者三様の観点で話し合ううちに、例えば、運動場面において自分から積極的に集団の中に入って活動せず、いつもひっこみ思案な行動をみせていたA男は、他の保育場面においてもその傾向がみられた。これは保育者からみて、禁止や抑制が強すぎると思われる親の態度や、入所前は祖父母に昼間育てられていたため、ほとんど外あそびの経験がなかった、などが影響するのではないかと話し合われた。このように運動経験の乏しい生育歴からすれば、入所当時、他の子に比べて歩行もぎごちなく、ペタペタと歩き、その他の行動も何となくねくねしているという保育者の観察や、星の観察した運動に適切な筋緊張のコントロールができない本児の特徴からもうなずける。したがって、A男の体育指導においては、運動場面だけでなく、もう少し基礎にある運動体験を豊富にし、かたがた、家庭の養育態度も本児がのびのびとした行動が行なえるように、この線にそって育てるよう保護者とも話し合う必要が感じられた。

ここから言えることは、これらの要因を把握した上であれば、

子どもの本当の姿や、これからの指導方法も見出せるのではないかということが確認され、今後この線にそって事例研究および、これらの要因の働き合いを知るための分析を続けていこうということになり、事実上研究会の出発となった。

二　目的の設定

幼児の心身発の姿を、その環境も含め、力動的に（各分節をおさえながら、全体の布置の中で綜合的に）把握するというねらいのもとに、次のようなことを計画した。

(一)　どういう要因をとらえるか

A　本人の要因

(イ)　運動能力をみる

研究の内容としては子どもをいろいろな面から観察し、把握しようということであるが、最初のきっかけが体育指導なので運動能力を中心にみる。

(ロ)　保育場面における行動特徴（社会適応）をみる

先の事例研究におけるA君の場合、彼のひっこみ思案な、ぎごちない運動は、他の保育場面における行動特徴（社会適応のパターン、広くいえばパーソナリティの特徴）を反映するものであった。このようなことがいえるかどうか、運動能力と社会適応との関連をみる。

(ハ)　知的能力をみる

運動や社会適応の背景にあるものとして、知的能力をおさえる。

(二)　身体の形態面をみる

運動能力は身体の機能面であるが、これを形態面との関連でみる。

B　生育歴・環境調査を行なう

Aの背景になる生育歴・環境調査を行なうが、今回は運動能力を中心にしたので、一般的な発育歴の他、特に運動と関係をもつと思われる両親の遺伝や環境、例えば、運動機能、スポーツ経験等もとりあげる。さらに、全般的な親の養育態度は、子どもの行動、特にその社会的行動には、かなり影響すると思われるので調査を行なう。また、子どもの運動経験を広げる遊びの状況や環境についても調査する。

(二)　研究をどのように方向づけるか

以上のような調査・検査と、保育者の生の情報や行動観察をあわせ、子ども一人一人を浮かび上がらせる方向で事例研究を行な

い、子どもをどんな風に援助していくかを保育の中で方向づける。それに平行して、各要因の働き合いを知るために、要因間の相関分析を行なう。その中で、幼児にとっての運動の意味、社会性とは何か、などを保育活動の中で、子どもたちの姿から学びとっていこうという課題が設定された。

方　法

対象は埼玉県与野市立鈴谷保育所の三歳十か月～六歳三か月までの男女三十名である。

時期は一九七五年十月～一九七六年一月までである。

保育所は埼玉県の県南にある一都市に所在し、定員六十名、保母数十名の小規模な保育所である。保育所の概要及び児童の家庭状況は、次頁の通りである。

各検査・調査は次のとおり行なった。

一　運動能力検査

運動能力検査は東京教育大学幼児運動能力テストを用いて行なった。

(一)　測定種目

〈体支持持続時間〉

腕と肩の筋力の持久性を調べるテストである。また、精神的ながんばりや、粘り強さ、も関係している。

〈立ち幅とび〉

跳躍力を調べるテストである。強い筋力をすばやくだすことが必要な運動で、運動要因は瞬発力である。

〈ソフトボール投げ〉

投げるという動作は全身の各筋群が協応して行なわれる。遠くに投げるためには強い筋力も必要である。このように、基礎になる運動要因は瞬発力であるが、幼児の場合、調整能力も重要な要因となっている。

〈両足連続とび越し〉

両足をそろえたまま、五〇cm間隔にならべられた十本の棒（五cm角五〇cm）をできるだけ早くとび越すこの運動は、全身の調整力、支配力、敏捷性が要因となっている。

〈二五m走〉

短距離走であり、日常の生活や運動あそびの中に含まれる基礎的能力の一つである。速く走るためには強い筋力と神経系の働きも関与する。基礎となる要因は瞬発力である。

(二)　測定上の注意事項

〈体支持持続時間〉

この種目は持久力のテストであるので、一回だけ行なわせ、頑張らせるために、激励のことばかけをしてやらせる。記録は足が床から離れて失敗するまでで、秒単位で測定する。

〈立ち幅とび〉

この種目では踏み切りを行なう際、踏みきり線、片足踏みきりを注意させ、手を振り反動をつけて踏みきるなどの示範を行なう。記録は踏み切り線と着地点との最短距離をセンチメートル単位で、二回測定し、よい方とする。

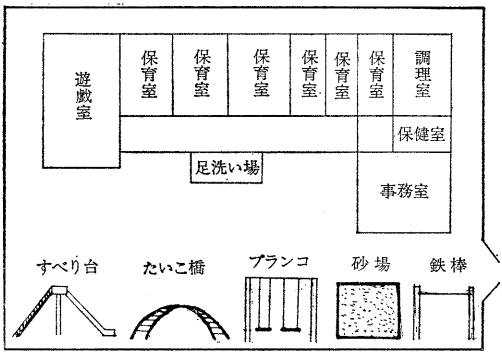
〈ソフトボール投げ〉

線をふまないようにボール（教育一号、周囲二六・二～二七・二cm、重さ一三六～一四六g）をきき手に持たせ、助走なしで、オーバースローで投げさせた。記録は線から落下地点までの最短距離をメートル単位で、二回続けて投球し、よい方をとる。

〈両足連続とび越し〉

この種目も次のことが失敗であることを示範した。(イ)両足をそろえてとばないとき、(ロ)棒を二個以上一度にとび越したとき、(ハ)棒の上にあがったり、けとばしたりしたときである。また、速さだけを強調せず、正確さをまず強調し、兎さんのようになどの表現で跳び方を示してもよい。記録は失敗せず棒十本を跳び終るまでを十分の一秒単位で、二回行ない、よい方をとる。

保育所の概要



土地面積	589.62m²
建坪面積（平屋）	371.57m²
園庭面積	218.05m²

保護者の職業

商工・サービス業	事務員・技術職	公務員	現業	自由業	その他	合計
35%	25%	10%	7%	17%	6%	100%

住宅環境

自宅	借（間）家	社宅	合計
54%	33%	13%	100%

部屋数

1室	2室	3室	4室	5室	合計
3%	25%	38%	29%	5%	100%

〈二五m走〉

三〇mの直走路をつくり、二五mのところに印をつけ、三〇mのゴールラインまで走らせる。また、男女別に、走能力のほぼ同じ者二人ずつ走らせた。記録は、合図から二五m地点を通過する時間を十分の一秒単位で、一回だけ行なう。運動能力テストは、体育指導を行なっていたことから、子どもたちにも抵抗感がなく、スムーズに行なえた。さらに、測定値はそれぞれ種目別、性別に半年毎の五段階評定に換算し、個人別の合計点を出した。測定方法等の詳細は昭和四十九年三月、東京教育大学体育心理学研究室より発行の『行動観察と運動能力テストからみた幼児の運動能力の発達』を参照のこと。

二　社会適応性などの行動特徴をみる

(一)　社会適応性

今回は、John M. Digman による就学前児童のための教師評定用のリスト(注1)を用いた。因子分析により、九因子が抽出されているが、今回は全体的適応をみるため、因子に分けずに用いた。項目は三十八項目よりなり(次頁参照)七段階とし、左から七、六、五、四、三、二、一と配点し、その合計を出し、保育園内の相対評価により五段階に分け、社会適応性をあらわす尺度として用いた。

(二)　性格評定

奥平が作成したリスト(一般にみられるパーソナリティの特徴を、相関分析から推定された三領域に分けて評定する)を用い、性格評定を行なった。その領域と項目は次の通りである。

(イ)社会活動性――友だちがすぐできる。人前でも平気で歌ったり話したりできる。友だちの先に立つ。人気がある。同年の子にすぐ慣れる。外であそぶのが好き。やられた時やりかえせる。活発で元気がよい。いつも楽しそうである。言葉、動作がはやい。体が丈夫である。

(ロ)情緒の安定性――べそをかかない。すねたりふくれたりしない。かんしゃくを起こさない。母からはなれる。小さい動物をかわいがる。

(ハ)気質的安定――きれいずき。きちんとていねい。長続きする。落着きがある。ものを大事にする。

これも、各領域毎に得点を加算し、園内での相対五段階評定を行なった。

(三)　因子別行動評定

飯島婦佐子氏が保育者による行動観察をもとに作成された、因子別幼児行動評定尺度(注2)を用い、右二つと同じ手続きにより、それ

保育者による社会適応性評定表

	非常に	かなり	やや	どちらともいえない	やや	かなり	非常に		
1 他の子供の先に立つ方である								他の子供のあとにつく方である	1
2 興味、態度が安定している								興味、態度が変りやすい	2
3 注意力、集中力がある								注意力、集中力がとぼしい	3
4 信頼できる感じである								頼りない感じである	4
5 持続力（粘り）がある、根気がある								持続力（粘り）がない、あきっぽい	5
6 清潔・整頓がよく、きちんとしている								清潔・整頓がわるく、だらしがない	6
7 他人の持物に注意する								他人の持物に不注意でこわしたりする	7
8 非攻撃的、親切、思いやりがある								攻撃的、いじわる、思いやりがない	8
9 健康である								体がよわく、病気等で休みやすい	9
10 教室の中で静かである								うるさい方である	10
11 良心があり、正直である								不誠実でうそをつくことがある	11
12 協調性があり、従順である								強情で、素直でない	12
13 人なつっこく、他人を受け入れる（うちとける）								警戒心があり、人とうちとけにくい	13
14 教師の注意をひきたがる								教師の注意をひこうとしない	14
15 陽気で明るい								陰気である	15
16 敏活、気がまわり、精力的である								だるそうで無表情、疲れやすい	16
17 あけっぴろげな性格である（表現的）								無口な方であまり気持を外に出さない	17
18 外向的で他の子と自由につきあえる								内気、恥ずかしがりで、孤立的	18
19 想像力に富む								想像力がとぼしく、現実的である	19
20 美的感受性がある								美的感受性がない	20
21 おぼえがはやい								おぼえがおそい	21
22 自負心が強く、積極的に自分を出す方								ひっこんでいる方である	22
23 たやすく、また、正しく指示に従える								いわれた通りになかなかできない	23
24 友達に人気があり、好かれる								友達に人気がなく、きらわれる	24
25 やきもちをやかない、すねない								すぐやきもちをやく、すねる	25
26 しっかりしていて、自分の権利は守る								弱虫で、いじめられるとすぐ屈服する	26
27 自分の考えや能力に自信をもっている								自信がない	27
28 集団活動やグループ遊びを好む								一人で遊んだりやったりするのを好む	28
29 冒険好きで、大たんである								用心深く、おく病である	29
30 人に頼らず、自立的である								依頼心があり、教師に頼りたがる	30
31 気にしたり心配することが少ない（神経質でない）								わずかなことを気にしたり、心配する（神経質）	31
32 新しい状況にすぐ慣れる								新しい状況になかなか慣れない	32
33 おおらかで、のんびりしている								興奮しやすく、すぐいらいらする	33
34 態度が洗練されて行儀がよい								行儀がわるい	34
35 異性と遊ぶことが多い								同性と遊ぶことが多い	35
36 神経的習慣（指しゃぶり、爪かみ、頻尿、おもらし、どもりなど）はない								神経的習慣がある（具体的に）	36
37 両親は概して子供を受け入れている（あたたかい）								拒否的である（つめたい）	37
38 両親は概して寛大で、子供にまかせている								厳格、または過保護の傾向がある	38

ぞれ(a)慎重さ、(b)自己主張、(c)創造性、(d)社会活動性、(e)感覚運動的活動の五因子につき評定した。項目は、日本心理学会第三十九回大会論文集（一九七五年三一二頁）を参照されたい。

なお、幼児の行動につき三つの異なる評定を行なったのは、運動能力が、いわゆる子どもの行動特徴（パーソナリティ）のどの領域と関連を示すか、を知るためである。

三　知能検査

鈴木ビネー知能検査を用い、個人別に検査した。この時、テスト場面での行動を、課題意識がある、反応がはやい、などの二十六項目から観察した。（チェック・リスト使用）

四　日常的基本動作

目的設定では特に入れていなかったが、運動の基礎に、日常観察される歩行や手先の器用さがあると考えたので、これを、いわゆる運動能力テストのように設定場面でみるのではなく、日常の観察を通して把握した。これは絶対評価ではなく、保育者による年齢集団（クラス）毎の五段階評定にし、これと運動能力との関連をみた。

五　形態測定

測定項目は身長、体重、胸囲で、それぞれは厚生省による乳幼児身体発育値より、五段階評定した。また、カウプ指数はおのおのの身長、体重を $\frac{体重(g)}{身長^2(cm)}\times 10$ の公式にあてはめ求めた。

六　生育歴・環境調査

- 家族構成
  - 家族数
  - 子どもの数および順位
  - 保護者の職業
- 住居
  - 住居の種類，階
  - 部屋数
- 遺伝要因
  - 両親の体格
  - 両親の運動機能
  - 両親のスポーツに対する経験と興味
- 生育歴
  - 妊娠中の異常の有無
  - 分娩時の異常の有無
  - 在胎時間
  - 授乳形態
  - 生下時の身長，体重，胸囲およびカウプ指数
  - かたことの始期
  - 排泄の自立
  - ひとり歩きの始期
  - ペットの有無
- あそび環境
  - 帰宅後のあそび場所
  - 外あそびの場所と種類
  - 家の中のあそびの種類
  - 友だちの数
  - あそび集団の数
  - 外あそびの志向性
  - 兄弟とあそび頻度とあそび相手
  - 一週間あたりの外あそびの時間数
- 睡眠・栄養
  - 睡眠時間
  - 偏食の程度
  - 牛乳飲用の程度
  - 肉食の程度
  - 食事量の程度
  - 食事上の問題の有無

保育所資料と家庭に配布した質問紙により、家庭環境、生育歴、あそび環境、栄養、睡眠、養育態度をみた。家庭環境調査の質問項目は五十九頁の表のとおりである。

また、養育態度は①授乳・離乳の仕方、赤ちゃんの時の扱い方、②排泄・食事・着脱・就寝・清潔・片づけ等の基本的生活習慣に関するしつけの態度、③甘えやかんしゃくに対する扱い、④行動の制限、⑤友だちあそび、⑥家族関係・兄弟関係・父母の意見の一致度等の項目を含む質問紙を保護者に配布し、調査した。

日常行動観察やテスト時所見も、それぞれ個人別にまとめ、事例研究の際の資料として整理しておく。（つづく）

（注は次号にまとめて掲載します）

倉橋賞をいただいて

今回、思いがけず倉橋賞をいただきましたが、私どもにとって、二つの意味でたいへんうれしいことでした。

一つは、この研究が、子どもの発達の姿をしっかりとらえたいという切実な気持ちから出発したものではありますが、方法論について、ある理論や見通しのもとにはじめからがっちり組み立てられたものでなく、むしろ、現実に研究を進めていく過程で手がかりを見出すという模索的なものであり、一方では確かな手ごたえを感ずると思えば、一方では果たしてこれでよいのかと不安を感じます。発表も、第一回はこの点につき指導をあおぐことを主眼にしておりましたので、受賞は「うん、それでやってみなさい」と肩を叩かれたような励ましと受けとれました。

二つ目は、研究の形についてですが、最初、星が体育、奥平が心理と専攻は異なっていますが、保母養成校の教員として、子どもに学ぶという共通目標を持って、週一回保育所に行っておりましたが、やがて、子どもの問題を中心に保育者との話し合いが持たれ、これが「共同研究」の形に発展して行きました。この方法の実り多いことに気付き、この可能性をさらに広げて行こうとしていた時の受賞でしたから、みんな喜びをもってこれを確認し合えたことの二点です。

学会発表は、入会手続き等の関係で、今回は二名の形になりましたが、実際は、与野市鈴谷保育所の保育者の方たちとの共同研究です。保護者の方たちの御協力もいただきました。

このような経過をとった研究ですので、論文もできるだけ過程に即して記述させていただきましたので、研究の進め方、考え方、具体的な方法やでてきた結果の解釈や考察などについて、みなさまの率直な御意見や御示唆をいただきたいと願っています。

（奥平洋子）